

石仏と民間信仰

民間信仰と石造物

路傍に立てられている庚申塔や馬頭観音、墓地の入口などにみられる石地藏、あるいは神社の境内に建てられている狛犬や燈籠など、石で造られた遺物が我々の身近に数多くみられる。近寄ってよく見ると、その一つ一つの石造物にはおおむね造立者の名前と村名、それに年号が刻まれており、なかには、庚申講中・念仏講中・女人講中などという講の名を記したものも多い。

講というのは、信仰を同じくする者が結成した信仰の集団のことである。庚申講は庚申信仰の信仰集団であり、念仏講は念仏信仰の集団である。また女人講中とは女性だけで結成された講である。

講には、特定の宗派に属する寺院や、ある種の神社が信者を組織するために作られたものがある。たとえば、日蓮宗の題目講や浄土真宗の報恩講、あるいは野島の浄山寺のように地藏信者を“御奉公人講”というような講に組織したものもある。これら特定の寺院や神社と直接には関係なく、村人によって結集され独自に運営された講もある。庚申講や念仏講の多くは、こうした地域的な集団である場合が多い。

このほか、江戸時代の女性たちが信仰した十九夜待（まち）、二十三夜待などの講は、特定の教祖や指導者によって運営されるのではなく、村の中で信仰を同じくする人達の全体的意思によって運営されたものであり、村の行事として伝承され、人びとの習俗となった信仰集団である。

このように、特定の宗教組織の外にあって、講を結成し独自の信仰を展開させたものを民間信仰という。



天嶽寺入口 二十三夜講
勢至菩薩像

江戸時代の村びとは、近隣の人びとと結成したこれらの講を通じ、さまざまな民間信仰を発展させたが、人びとは民間信仰に何を求めたのであろうか。その一端を知るには民間信仰の所産である石造物の銘文が手がかりとなる。

たとえば、大間野の光福寺境内にある天保6年（1835）の普門品供養塔に「天下泰平 五穀成就 村内安全 諸人快楽」と刻まれている。これは、大間野村の観音講の人びとが法華経普門品（観音経）を読誦し、普門品の呪力で、世の中が平和であり、災害がなく、作物が豊かに稔り、村びとが仲良く、家族が安全に暮らしていけることを願っていたことを示している。民間信仰は人びとの生活のさまざまな願いをささえるとともに、村びとが講に集い飲食を共にすることで共同体意識を深め、講はさらに娯楽の集団ともなった。江戸時代を通じ講が盛んであったのは、これらのことによるものであろう。

石造物の種類

民間信仰では多くの石造物を造立しているのが特徴である。これらの石造物によって江戸時代の民間信仰を知ることができるのと同時に、庶民文化の一端をうかがうこともできる。

市内の主な石造物をみると、庚申塔361基、石地藏194基、御手洗石85基、馬頭観音67基、石燈籠58基、普門品供養塔41基などが数えられる。また数少ないものでは、十三仏供養塔の4基、法華塔の3基などがある。(中略)

総数は、正保年代から昭和年間までに1130基が数えられる。このほか、宝篋印塔、五輪塔、諸神塔、あるいは歌碑や墓石までかかげると、石造物の数は市内でも数え切れないほどである。

宝篋印塔（ほうきょういんとう）

宝篋印塔は、宝篋印陀羅尼經を納める塔であることからそのように呼ばれているが、多くは鎌倉時代から墓碑として建てられている。市内の宝篋印塔は今までに132基が確かめられている。そのうち最も古いものは、増林の勝林寺にある元和2年（1616）12月の墓石である。

元和期の宝篋印塔は市内で7基数えられるが、寛永期になると86基とその数が急増している。また、正保年間は12基、慶安年間には7基が数えられ、承応年間になると急に造塔数が少なくなる。そして寛文期以降になると舟形の墓碑が一般化し、宝篋印塔は大型の供養塔として造塔されるぐらいである。

市内の宝篋印塔は、中世の板碑と正保・承応年間以降の石地藏や庚申塔の間にあって、最も多く造塔された石造物であり、元和年間から寛文年間ごろまでの重要な歴史資料の一つといえよう。



越ヶ谷の天嶽寺
宝篋印塔

地藏信仰

地藏は閻魔の本地仏であり、死者を地獄の苦しみから救う菩薩とされている。とくに子どもを守る仏として信仰されたため、“子育て地藏”として親しまれる地藏が多い。このほか地藏は火防・盗難除け・かさいぼ取りなど、庶民の願いを聞きとどける仏として深くなじまれた。

市内の石地藏は増林の墓地にある正保元年（1644）の舟形光背の地藏が最も古いものである。また大沢の照光院に承応元年（1652）のものがある。これには「奉造立六地藏菩薩為二世安楽也、念仏講結衆」の銘がある。17世紀の中頃に念仏講が結成されていて、石地藏を造立するようになったことが知れる。

造立数を年代別にみると、まず寛文年間に18基と最初のピークをみせる。後述するように、庚申塔はこの年代には7基であるから、約2倍の造塔である。元禄年間に2番目のピークがあらわれるが、その数は9基、庚申塔20基の半分ほどになっている。享保年間になると、その数も38基と江戸時代で最高のピークに達する。この年代は庚申塔も35基数は多いが、石地藏の造立数の方が多^い。この享保年間には馬頭観音が初めて造立されている。石

地蔵はその後各年代を通じ造立数が少なくなっている。

石地蔵を建てる講中には念仏講中が多いが、なかには七左町下組の墓地にある寛文10年(1670)の石地蔵に「奉待庚申之供養二世成就所」とあるように、庚申塔として建てたものもある。また特殊なものには、大房の薬師堂境内にある享保10年の地蔵がある。これは死刑になった人の菩提を弔ったものである。「大沢猫の爪」には、この地蔵造立の由緒が次のように記録されている。

「一、享保年中、当町佐兵衛屋敷喜兵衛分=借地罷在候虎屋伊兵衛親族之者、人殺金子奪取候段、不屈至極=付所御仕置=被仰付、大房村死馬捨場堤下往還通=而獄門=被行候、今、石地蔵一体雨屋付、銘戒名等有之、享保十巳四月願主紀州若山宇左衛門、脇=上州清六ト有之、左方=大沢町虎屋伊兵衛妙性信女与有之候、」

庚申(こうしん)信仰

庚申信仰は道教の「三尸説(さんしせつ)」によるものである。これは60日ごとにめぐってくる庚申(かのえさる)の日に、人の体内にいる三尸というものが、人の寝るのを待って天の司命という神に、その者が60日間に犯した罪を報告すると、司命はそれにもとづきその者の寿命を裁定するという信仰で、そのため庚申の晩は色欲を避けるなど精進し、一晚を寝ずに過ごすことによって三尸の上天を防ぐというものであり、これが平安時代貴族の間に広まり、それに仏教やわが国の古い信仰等が結びついてできた民間信仰である。

さらに江戸時代の末期には富士信仰と結びつき、「孝心」というの文字に置きかえられた明治2年(1869)の庚申塔が旧向畑村の堂面の観音堂境内に建てられている。

庚申信仰はすでに室町期には一般庶民にもひろがっており、越谷市内では西方の天文21年(1552)の弥陀三尊圖像板碑に「奉庚待供養」、東方の天文22年の同型の板碑に「奉庚申待供養」との銘がみえる。室町時代の末期には庚申信仰が市内にも広がっていたことを示している。

これが江戸時代になると全国的に広がり、いたるところに庚申講が結成され、たくさんの庚申塔が造塔されるようになった。

庚申塔

越谷市内の庚申信仰は、その造塔数をみて変遷を探ることができる。庚申塔が361基、地蔵庚申が3基、弥陀庚申が1基、猿田彦大神が23基、塞神が9基、板碑が7基と、庚申信仰の石造遺物は、合計404基が確かめられる。(中略)

市内の庚申信仰が造形となって現われるのはまず板碑にはじまる。

16世紀後半は戦乱の世だが、このころの天文21年の弥陀三尊圖像板碑、同22年の同型の板碑、十三仏板碑1基、釈迦三尊板碑1基、二十一仏板碑3基の計7基に庚申信仰の銘がみえる。しかし17世紀前半は宝篋印塔や五輪塔などが多数造立されているが、庚申信仰を表すものは1基も発見されていない。

これが17世紀後半になると庚申そのものの塔が立てられてくる。市内最古の庚申塔は大成町の承応2年(1653)の板碑型の文字塔である。

これには、

			清 右 衛 門
			德 右 衛 門
承応二年	甲	施主	市 右 衛 門
	午		七 良 右 衛 門
種子		奉供養庚申二世安楽処	治 右 衛 門
		敬伯	四 郎 衛 門
	無神月	吉日	六 右 衛 門
			五 左 衛 門



大相模公民館そば
承応2年の板碑型庚申塔

とある。

種子(しゅじ)はバク(釈迦)[という梵字]を刻み、造塔者8名の名が見える。

二番目は四条の二童子を刻む寛文2年(1662)の駒型の文字塔である。

三猿が刻まれた最古のものは、増森西川の寛文4年(1664)のもので、庚申講の銘のあるものは、相模町の大聖寺東門前のある[寛文7年の]庚申塔である。

また日月と三猿が刻まれた最古のものは南荻島の寛文9年(1669)と笠付型の文字塔が初見である。

青面金剛の彫像で最古のものは、大間野の光福寺境内にある延宝8年(1680)の笠付の庚申塔である。このうち承応2年の大成町のものは、種子の釈迦が主尊として表現されており、越ヶ谷の天嶽寺の舟形光背をもつ承応3年(1654)の石地藏や、宮本町の十王堂の寛文3年(1663)の弥陀尊像も庚申の銘が入っており、庚申塔に数えられる。

このように承応2年(1653)から延宝8年(1680)までの30年間は庚申塔の主尊が青面金剛として表われず、弥陀や地藏などいろいろな仏が主尊とされている。

次に庚申塔の造立を10年間隔で推移をみると大きなピークが二つある。

一つは、18世紀前半の正徳元年から享保15年の20年間で、この間に44基の造立をみる。

次のピークは寛政3年から同12年の10年間で、36基と最大の造立をみる。次の10年間を加えた20年間では、61基と最高の造立をみる。

また庚申塔の型態別の造立をみると、18世紀の前半は青面金剛庚申塔の造立が多く、正徳元年から享保5年までの10年間に22基と最大の造立がある。この期の庚申塔は、青面金剛像のほか日月、三猿、二雞などを彫刻した丁寧なものが多い。

寛政3年から12年の10年間、青面金剛庚申塔の造立は13基に対し、文字庚申塔が23基と急激に造立された。

これ以降の庚申塔は、文字庚申塔が多く造立される。この時期に庚申塔の造立に大きな転換がみられる。

このように盛んに造立された庚申塔も明治期にはいと急激に減り、その数は3基にすぎ

の七左衛門の観照院の庚申塔に「十一月庚申」とみえ、寛政12年(1800)の増林城ノ上の稲荷神社の庚申塔には「初庚申」とあるように、初庚申と納め庚申に庚申塔の造立が集中していたことと思われる。

これら庚申塔を造立した講は数人から百人以上、組中から村中までであるが、なかには女人講中という女性だけのものもある。たとえば享保15年(1730)の登戸の報土院の庚申塔には「女中三十人」と刻まれており、このような女人講中の庚申塔は4基確かめられている。

このほか庚申塔の中でも相模町の大聖寺に立てられた天保6年(1835)の百庚申は特筆すべきものの一つである。

百庚申は多人数により百基の庚申塔を一ヶ所に立て、一基の庚申塔造立にくらべてより多くの功德を期待したものであるが、大聖寺には現在99基が残っている。これらはいずれも「庚申」と文字が刻まれ、日月が付いた柱状型の小型の規格品である。

この百庚申の施主の住所を調べると、市内を中心に東は下総国の江戸川左岸から、西は綾瀬川の右岸の足立郡南部領の村まで、南は江戸までの広がりを見せており、当寺の大聖寺の信仰圏がうかがえよう。

天保9年(1838)には百庚申の主基として青面金剛像の庚申塔と2基の石猿が造立された。この世話人は4名、石工は越ヶ谷宿の小嶋長兵衛である。

また庚申信仰には神道家の影響による猿田彦命を主尊とする猿田彦大神の塔もある。たとえば、大林香取神社境内の文政11年(1828)のものには「猿田昆古大神」とあり、「武蔵国一宮神主岩井伊予守物部連正興謹書」とある。この猿田彦の塔は市内で23基が確かめられている。

このほか庚申塔に含まれるものに塞神(さえのかみ)塔がある。塞神は境の神として、村内に悪疫が侵入するのを防ぐ神として古来から信仰されていたものであるが、市内には9基が確かめられている。だがいずれも、かつて忍藩領であった東方・見田方地域に集中している。なかには「庚申」と刻まれたとみられる文字を「塞神」と改刻したものとみられる。

これは明治の神仏分離令の布告とともに、忍県に登用された平田篤胤の門人木村御綱の手によって篤胤の説く「庚申などと申すな、塞神と唱えよ」が忍県で実施されたための改刻のようである。

明治初年の忍県の宗教政策が、忍領の見田方村など八条領八ヶ村においても、庚申塔の破却や改刻という形で行なわれたことを実証している重要な資料の一つといえよう。



大聖寺 百庚申

馬頭観音

馬頭観音の信仰は、農耕と運搬とにもつばら馬を使役するところから、その供養を中心に興ったものである。江戸時代中期ごろから信仰が盛んになり、路傍や馬捨場などに、その供養塔が多く建てられている。

なかには、馬の頭部を上に乗せた菩薩像が刻まれているものがある。この馬頭観音は市内に67基が確かめられているが、文化年間から天保年間、そして明治以降に多く造塔されている。

[右の写真は、砂原にある元荒川の土手道の上に安置されている馬頭観音像の石仏である。頭上には馬の頭が乗せられている。]



砂原の元荒川土手道の
馬頭観音

普門品（ふもんぼん）供養

普門品は、「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」という法華經の經典であるが、これを略して観音經と称される。

『越谷市民俗資料』によれば、西方では7月8日に夏祈禱をする。男が太鼓を持ち観音經を唱えがら一軒一軒廻って歩いたという。また大泊では4月10日が春の百卷經、二百十日が秋の百卷經と称し観音堂で観音經を讀誦した。さらに毎月一日は観音經の日と定められ、講中の廻り番で行っていたといわれる。

この「観音經」と称される宗教芸能は、太鼓の胴のギリギリとできるだけ強く締め、はじき出されるようないさぎよい音調にともなって、観音經を唱えるのであり、導師一人のほか三～四人が組んで行うものである。導師といっても鍛錬を積んだ村びとのことであり、はじめは僧侶の指導によって行われたが、のちにはまったく村びとたちによってすべてが行われ、かつ子孫に伝えられた。村内の諸行事のなかでも男性的な芸能といえよう。「産社祭礼帳」によると、寛政9年6月、越巻丸の内と中新田の惣若者一同が観音經を取立て、毎月一日万蔵院薬師堂にて讀誦するようになった。腰弁当で朝から始め、一人で三十三卷宛、これを讀誦したという。したがって観音經もこの頃には一般的に広まっていたことが知れる。

このような観音講中によって造立された供養塔のうち市内最古のものは、元文5年（1740）の蒲生の光明院の無縁墓地のものであり、これには、上部に馬頭観音の梵字「カン」が刻まれ、その下に三面六臂の馬頭観音像が描かれている。そして、その両脇に「奉供養」「普門品讀誦」と刻まれている。増林の護郷神社（旧・浅間神社）境内のものは、享和2年（1802）造立で、これには「奉讀誦普門品拾万卷供養塔」と刻まれている。このほか一万卷・五万卷讀誦の記念に造立されたものが41基数えられるが、なかには庚申塔に普門品供養塔を兼ねているものもみうけられる。

このほか各宗派の名号や題目、あるいは經典の名を石に彫って供養したものとみられる。このうち名号供養塔で古いものは、越ヶ谷天嶽寺にある慶安2年（1649）の「南無阿弥陀仏」と刻まれた塔である。南無とは帰依すること、つまり浄土教ではこの名号を唱えることで、誰もが極楽浄土に生まれ変わることができるかと説かれている。この種の塔は市内で30基を数える。また「南妙法蓮華經」と題目の刻まれたものも2基ほどみられる。

月待（つきまち）供養

月待供養には、十八夜、十九夜、二十二夜、二十三夜、二十六夜などがある。（中略）[女性による]講中がお堂や頭屋と称した当時の家に集まって飲食をともにしながら寝ずに月の出を待つものである。特に二十三夜待は、勢至菩薩の出現を拝む信仰として全国的に行われている。

古くは、増林の勝林寺の文明3年（1471）の十三仏板碑に「婦命月天子本地大勢至・月待供養・逆修・文明三年十一月二十三日」の銘がある。造立日の二十三日からみて二十三夜待と思われる。

江戸時代に入っの月待供養塔のうち二十三夜塔は、越ヶ谷の天嶽寺に一つと、上間久里の地蔵堂に元文3年（1738）9月吉日の舟形勢至菩薩像の塔の二基がある。

十九夜塔では麦塚智泉院に「十九夜念仏・元禄十一年（1698）三月十九日」と刻まれた勢至菩薩像のものがあるが、これが市内最古の塔である。

十九夜講は十九日の月の出を待つ月待であるが、女性の念仏講が多かったようである。増森西川の嘉永6年（1854）の「十九夜念仏」塔に16名の女性の名が刻まれている。このほか、東方の文政10年（1827）2月19日の塔には、おまき他13名の女性の名がみえる。

しかし弥十郎の文化10年（1813）11月吉日の十九夜塔には、願主村中、世話人源助、市右衛門と男性の名が見えるので、女性に限らなかったかもしれない。

地域的には弥十郎、増林、花田、増森、登戸、西方、東方そして麦塚に11基がみられ、市の東南部に集中している。また十八夜待とは関係ないが、三野宮にある天保10年（1839）の庚申塔に「庚申待十八度供養」という銘がみえるのがある。



増林勝林寺
文明3年十三仏板碑

普請供養

市内の普請供養塔には石橋供養や敷石供養など39基が確かめられている。普請供養では、増林の清涼院墓地にある石灯籠供養塔が市内で最も古い。西新井の大石橋際の石橋供養塔は、明和3年（1766）の造立である。また延享元年（1744）11月の三野宮の石橋供養塔は「橋組二十一人」と刻まれてあるので、この石橋をかけるため21名の石橋講が結成され、何カ年かお金を積み立てた後、石橋をかけることができた記念の塔であったろう。

また蒲生1丁目の旧日光街道に、宝暦7年（1757）6月の「砂利道供養」塔が建てられている。これは蒲生公民館前の日光街道際にある普請寄付塔と一対をなしたものであり、宝暦7年に日光街道の大普請があったときのものである。蒲生公民館前のものは、このとき、長さ三百間（約540m）の道普請を寄付した常州茨城郡の袖山勝秀と、そのうち十間（約18m）の道普請を寄付した野州芳賀郡添谷長俊が建てた記念碑である。

宝暦7年の日光街道の普請は文献史料にみえないので、この一対の石塔に刻まれた金石文は唯一の資料として貴重である。

また敷石供養塔は社寺の境内に敷石を寄進したときに立てられた。このほか、大沢の照光院には安永8年(1779)に梵鐘を新鑄した鐘供養塔などがある。

このように普請供養塔は石橋、道路、梵鐘など、できるだけ長く保存されることを願って建てられたものである。

[右の写真の敷石供養塔には、「東門通、垢離取場、敷石供養塔」と刻まれている。]



大聖寺の敷石供養塔

道標と石燈籠

道路の辻やわかれ道などに、道の方向をしめした塔が立てられている。これを道標と称した。今までに市内の道標は13基が確かめられている。最も古いのは蒲生にある正徳3年(1713)の駒型の道標であり、「是ヨリ左大さかミ[大相模]道」とある。

このほか、庚申塔などが道標を兼ねているものが数多くみられ、種類別にあげてみると、庚申塔に26基、猿田彦大神に4基、塞神に3基、馬頭観音に3基、不動像に9基、普門品供養塔に1基の計47基が数えられる。これらを併せると60基の道標が確かめられる。

燈籠は仏教とともに寺院の施設の一つとして招来されたものである。それは、仏への燈明を献じ、仏の功德を得るための供物である。のちに、神仏習合が進むと神社にも燈籠が立てられ、いまみられるように、鳥居や狛犬と並び、石燈籠が神社境内に備えられている。

現在は二基一対の燈籠を奉納するが、古くは仏殿の正面に一基立てるものであり、二基一対の形で立てられるのは天正年間(1573~92)頃からといわれる。

石燈籠の奉納は民間信仰とは直接かかわりはないようであるが、江戸時代の石造遺物としてここにふれておく。

市内の石燈籠は江戸時代に58基が立てられている。承応の石燈籠が最も古く、延宝、貞享の各1基が残っているが、江戸時代の初期の石燈籠は数が少ない。享和年間以降にようやく奉納の数が増してくる。承応から寛政まで143年間に10基が立てられているが、享和から慶応までの87年間に30基を数える。この奉納の動機はいろいろあるが、参考までにこの一例を紹介しておく。

越ヶ谷町の商人、三鷹屋嘉兵衛が天保2年(1831)に駒木村(流山市)の諏訪社に石燈籠を奉納している。これは、嘉兵衛が文政7年(1824)に眼病を患ったとき、駒木村の諏訪社に10ヵ年のうちに石燈籠を奉納すると心願を掛け、そして天保2年6月に高さ9尺1寸余の石



天嶽寺

道標を兼ねている庚申塔
「南、こしかや」「北、のしま、
いわつき」と刻まれている。

燈籠一對を奉納したものである。心願を掛けてから8年後のことである。

奉納した石燈籠は小松石で、代金金17両2朱、石工は戸ヶ崎村幸右衛門である。そして6月20日の寄進供養には親類や近所の人と諏訪社に参詣している。

このとき、別当寺の成願寺に2両を奉納するとともに、御経料として三カ寺の僧に1朱宛を布施した。そのほか祝儀や酒食代等の諸経費を加えると、嘉兵衛が石燈籠の奉納に使った金は24両3分と銭83文であった。

このように、神社などへ心願を立てて寄進された燈籠もあったろう。

念仏講の諸相

ここでとりあげねばならないのは念仏信仰である。世間一般には念仏というと、浄土関係の浄土宗・真宗・時宗などの信仰としてとり扱われるがちだが、関東一帯にわたって、真言・天台系の念仏はすこぶるさかんなのである。阿弥陀如来への信仰、善光寺参りが民間に定着したのも古いことであり、かならずしも浄土宗の宗勢と結びつくのみではなかった。これにはおそらく、宗派的色彩のうすい民間遊行僧（ゆぎょうそう）（中世では遊行聖）、行者、行人、山伏などの布教にあずかっているものと思う。

塔碑で見ると、数は少ないが江戸初期から存在することは、地藏・観音と同じであり、中期から後期にかけて隆盛だったことがわかる。

この念仏に当然包含してよいものに、十三仏と月待とがある。十三仏は、虚空蔵・大日以下の諸仏菩薩明王を、忌日・年忌に配当することによって興った信仰で、中世の[十王信仰の]産物と考えられている。真言宗の熱心な信者の宅では、弘法大師画像（高野山で受けてくるが多い）と並べて十三仏の画像を崇めている光景に接するものである。

月待は中世からなるが、江戸時代にはとくに、二十三夜・十九夜の講が発達したようである。碑塔では、仏一体（如意輪観音）を中心に「為十九夜念仏供養二世安楽也」（元禄12年、西方観音堂境内）、同じく仏一体（[勢至菩薩]）に「廿三夜講中敬白」（元文3年、越ヶ谷天嶽寺境内）などを古い例として、十九夜・二十三夜講が各所に結成されていたことが明らかである。ことに十九夜講は、「女人講中」と刻したものが多く、婦人たちの集団組織を前提としている。江戸時代には女性が極度に圧迫され、文字通り「男尊女卑」の社会であった、とよく説かれて来たが、いっぽうで女性も集団行事の中でたがいに慰めあうことを行っていたことが明らかになる。

加えて越谷地域では女性の講組織が旺盛である。『越谷市民俗資料』をひもといた人は痛感したことであろうが、一般的にいて越谷市域には諸集団の発達がいちじるしいが、中でも、娘講・嫁さん講・おかみさん講・念仏講、と女性のみで形づくる年齢階梯的講の発達は、目を見はるものがある。

こうした現行の民俗がそのまま江戸時代にさかのぼりうる、とも思われぬが、そうした現象の素地というべきものは、まさしく右の「十九夜講」にあらわれている、といつてよい。

これらのうち、念仏講は民衆文化史上の貴重な存在である。詠誦の念仏ないしは念仏芸能を生む母体であった。いま下間久里・向畑・増森・越巻、その他各所に老女たちの念仏講があり、ほぼ月一度の会合をもっているが、そこで詠誦されている念仏和讃の類は、いずれも江戸時代後期あたりとほぼ一致するものと見てよいのではなかろうか。（後略）

出典：『越谷市史』の「通史上」p1220～1239、

「第二節 民間信仰の種々相」と「第三節 念仏と獅子舞」の〈念仏講の諸相〉

- ※ 以上の解説は、昭和50年当時の調査結果に基づく『越谷市史』の記述内容です。
この資料は、越谷市観光ボランティアガイド養成講座のために、越谷市観光協会が作成したものです。
なお、青字は、原文を手直した文です。
[]内は、原文に新たに付け加えた文です。
石仏の写真は、新たに挿入したものです。

監修者：加藤幸一